

2025 年度 大学院秋季入試（日本文学専攻）

博士課程（前期）

専門科目 古典文学/近現代文学/文学史

---

【合否判定の方法】

提出書類および外国語試験、専門科目、面接の成績を総合的に評価し、合否を判定する。

【合否判定の基準】

提出書類および各試験の結果を総合的に評価し、研究計画の妥当性および博士課程における研究遂行能力を有しているかを判断する。

1 試験日 2024 年 10 月 14 日

2 科目 (100 点満点)

3 出題意図

【1】古典文学

問一 和歌に関する問題である。「ひとく」は鶯のなきごえに「人来」を掛けた掛詞であるが、これには類例があり、『古今和歌集』巻第十九「誹諧歌」一〇二一番歌、梅の花見にこそ来つれ鶯のひとくひとくといとひしもをるはよく知られている。古今集歌は、平安時代のハ行音について論じるときには必ず取り上げられる例歌で、平素から文学だけではなく国語学、音韻史などにも目配りしておくことが求められる。

問二 現代語訳の問題であるが、係助詞及び係り結びに関する知識が問われている。「なか物<sub>の</sub>たまはぬ」の「ぬ」は、打消の助動詞「ず」の連体形である。未然形接続であるから完了の助動詞「ぬ」の可能性はないが、係助詞「か」を受けて連体形に活用している点にも気づけるといい。「なむ」の結びは省略されている。文脈からして「あらむ」などが省略されていると考えればいい。係り結びの法則は基本事項であるので、しっかり理解しておく必要がある。

問三、問四は文章全体の読み取りが問われている。

問三 「五条にてありし物」が女の家で食した菜の蒸し物であったこと、その蒸し物に和歌が添えられてあり、食した後、宗貞が女の生活に必要な実用的な品々を贈ったこと、などに注意すれば、宗貞が貧しいながらも心をこめた食事に感動していることが読み取れるであろう。「めづらしうめでたかりき」の意味も自ずと理解できよう。

問四 冒頭の「荒れたる門」、宗貞が目にした様を語った「簾もへりも蝙蝠にくはれて」

以下を丁寧に読めば、家の様子、貧しい生活などが読み取れるだろう。  
全体に、単語の意味や語法（古典文法）に注意して、丁寧に読解する習慣をつけておくことが望まれる。

## 【2】近・現代文学

文学史的に重要な作品の冒頭部を示し、どの程度作品に親しんでいるかを見るとともに、作品に関する知識や、表現・技法・文体などに対する分析力を確認する。

## 【3】作文問題

大学院日本文学専攻の授業を履修するに足る、日本文学史の基本的知識の確認を目的とする。

※著作権の関係で過去問題の掲載はできない。

以上